

「ギリシア人の哀歌」について

イギリスのブッチャー (S. H. Butcher) 教授が著した論文集『ギリシア天才の諸相』\* (Some Aspects of the Greek Genius) はとても意義のある書で、日本にはすでに訳書があるが、残念ながら中国にはまだ紹介する人がいない。今日『小説月報』の18巻4号を見て、張水淇先生の「ギリシア人の哀歌」を見つけ、思わず喜んだ。というのはこれはその中の「ギリシア人の憂鬱」の抄訳であったからだ。正式な声明はないけれども、張先生はその篇を抄訳するほか、又同書の中の「ギリシア詩のロマン主義の曙光」から三首の墓銘を取って、末尾に加えているから、原文のままの姿ではないが、意味と文句はほとんど全てブッチャーの本にあるものである。張先生が根拠としたのはやはり日本語訳本であるようで、それは日本語訳の誤解が保存されていることに見ることができる。もともとこの訳者も日本の知名の士であるが、疎漏はどうしても免れ難い。漢訳に云う。

「さらに若い妻が新婚の部屋からその亡き夫の墓にゆく、そのことの悲しさは言わずしてわかる。この事を詠んだ詩に次のように云う、

“結婚の床は当然の機に君を迎うも、墳墓は機に先んじて迎う。”」

案ずるに原書はただこの一句を引いて、英訳を加えない、——Hōrios eikhe se pastas, aōrios heile se tumbos——日本語訳は解釈を加えているが、上文に引くのと同じである。右の原詩は全部で六行、その大意を直訳すると次のようである。

「新しき住いは時と場所もふさわしく君を迎えた、墳墓は時も場所もわきまえず君を連れて行った、

君アナスタシア、快活な恵の神女の花。

君のために、父と夫はみな悲しみの涙を注いだ、

君のために、亡き魂の渡し守さえ涙を流すだろう。

君と夫が共に暮らしたのは丸一年にもならなかったのだから、

十六歳の時、ああ、墳墓は君を迎え入れた。」

Hōrios という言葉は「時」から変化したもので、意味は然るべき時になってということ、反対の Aōrios はだから時を失してとか時ならずとかの意であり、日本語訳が当然の機云々というのは要領を得ないようだ。ただ「亡夫の墓」は漢訳の誤りで、英文日文ともにただ新婚の部屋から墳墓までとしか言わない。原詩の三行目を見ても、彼女の夫が決して先に死んでいないことがわかる。

また漢訳には、「夫婦二人が一時間を隔てて死に、その合葬の墓は新婚の部屋となった。その墓碑には云う。“二人はあたかも同棲するかのようの一つの石の下に埋められ、幸せにも一つの墓に住むこと一つの部屋に住むが如し。”」

案ずるに日本語訳の最後の行は「幸せに一墓を共にするは一室を共にするが如し」とする。だが詩意を考えれば次のようであるはずだ。

「二人はあたかも同棲するが如く、一碑の下に埋められた、

公共の墓を飾りたてること公共の新居のごときあり。」

「幸せに」という言葉は余計なようである。だがこうした改変はおそらく訳述者の通癖で、一々問題にすることはできない。ブッチャー教授自身にしろそれはある。例えば“Dakrukheōn genomēn”という詩を、英訳して、

「わたしは泣きながら生まれた、わたしは泣き果たして死んだ、  
わたしは一生のうちに多くの涙を尋ねあてた。」

漢訳は日本語訳に基づき又少し変えて、

「わたしは泣いて生まれた、わたしは力を尽くして泣いて死んだ、  
わたしは生涯のうちに多くの涙を尋ねあてた。」

とする。しかし直訳すると意味は大略次のようである。

「わたしは泣きながら生まれた、わたしは泣きすぎて死んだ、  
わたしは多くの涙の中にわたしの一生を尋ねあてた。」

意味の些細な違いはもともと大した関係はなく、今はついでに言って、翻訳の難しさを示したにすぎない。 民国十六年八月十日。

※初出：1927年8月20日『語絲』第145期

---

\*日本語版『希臘天才の諸相』田中秀央・和辻哲郎共訳 岩波書店大正12年。